

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアケルの蒼い空 4 カシュガル市内観光の一日

19日、年に2～3回しか降らないはずの雨が朝から結構激しく降っている。ヌルさんとグリさんは明日からの最終準備の買い出しをするということで、今日はヤリクンさんというヌルさんの友人が、一日我々のガイドをしてくれた。朝、食事に行くと、三戸呂君が起きてこない。昨日の夜までは元気だったのだが、恐らく食事が美味しいのでつい食べ過ぎたことと慣れない羊の脂で胃が弱っていることによる下痢だろう。これも新疆の洗礼である。新疆の料理は日本人の口に合うのでつい食べ過ぎてしまうのだ。昨日の夜も街を歩きながら、「カシュガル面白いですねえ。明日が楽しみです。」と言って今日の観光を楽しみにしていたのだが、ここで無理をして登山が駄目になっては元も子もない。そんなわけで、三戸呂君を置いて一日観光へと出かけた。まず最初は郊外にあるアバクホジャ廟へ向かう。朝からの雨で夏とは思えないような肌寒い気温である。16世紀末の著名なイスラム教の指導者アバクホジャとその一族の墓である。モスクも併設されており、全体は緑と藍を基調にした色が鮮やかだが、廟として有名なドーム屋根の緑のタイルは最近の技術ではいくら粋を尽くしても剥がれ落ちてしまうということで、それが無造作に裏庭にころがっていた。日本なら文化財として触ることも叶わないのだろうが、このへんの感覚がいい加減と云えばいい加減である。いかにも中国的ではある。続いて案内してもらったのが古いカシュガルの街並みである旧城区。日干しレンガでつ



雨上がりの旧城区

くられた家々には、今でも昔ながらの生活スタイルで人々が住んでいる。とはいうものの、観光用に開放されているいくつかの家はなかでも裕福な部類にはいるのだろう。家具や調度品などは立派な物である。朝から降っていた雨はあがったものの、排水のことなど考えずに作られた街の路地からはなかなか水がひかない。そんな道をバイクで2輪車を引っ張る野菜売りが通っていく。スカーフを巻いた女の子。とうもろこしをほおぼって、尻あきズボンをはいた男の子。日常生活のにおいがした。

カシュガルの町の一番のおすすめは、なんといっても職人街だ。その職人街の中にある食堂で、ラグ麺で昼食。ラグ麺はウイグル人にとっては一番ポピュラーな食事。手延べの麺は、茹でて冷たい水でさらすとまるで日本の讃岐うどんさながら。そこに羊の肉とピーマン、トマト、にんにく、季節の野菜を炒めたあんをぶっかけて食べる。店によって少しずつ味が違うが、これまでまずいと思われたことは一度もない。前菜がわりのシシカバブと羊肉の肉まんをおかずはこのラグ麺で腹ごしらえをして、職人街に繰り出した。街全体が技のデパートといった趣で、およそ2kmくらいの通りの左右では、様々な職人たちが品物を製造し、販売をしている。ウイグルの楽器、ブリキ製品、銅製品、靴、曲げ物、金メッキ、木材加工、帽子……。そして辻々にはスイカやハミ瓜（新疆特産の歯ごたえのあるメロン）、桃、イチジクなどの果物の露天商。何時間見ても

飽きない。職人街の北の入り口には、新疆で一番大きいエティガルモスクがあって、そのあたりにはいつも大勢のムスリムがたむろしている。モスクには誰でも入れるが、去年僕は入場を拒否されたことがあった。それは僕がムスリムではないという理由からではなく、単に短パンを穿いていたからだった。足が見えないように腰から下に布を巻けばオーケーとのことで、入り口で絹の布を借りてスカートのように巻き付けて入ったものだ。イスラム教の戒律は厳しいが、だからといってムスリムでない人間に対して排他的なわけではない。9.11以来イスラム教に対するバッシングがあったり、アメリカを中心とする西欧諸国のテロに対する恐怖が喧伝されたりしているため、誤解が広がっている部分があるが、ムスリムの多くは我々と同じ普通の人間であり、普通に市民生活を送っている友好的な人々だ。こんなことは冷静に考えればすぐわかることだ。金曜礼拝の時には面積 16000 m² という広い境内はもちろん門の外まで信者で埋まるということだが、平日の今は人も少ない。しかし、それでも敬虔な信者が数人、礼拝をしていた。

夕方、登山隊に衝撃が走るニュースがはいってきた。信毎の本社と連絡をとっていた佐藤君が伝えたところによると、「今日ホータンでデモ行進を制圧しようとした警察に反発したウイグル人がバザール近くの派出所を襲撃し、ウイグル人 6 人、警官 4 人が殺され、関与したとされるウイグル人 70 人余りが拘束されている」とのこと。明日からのキャラバンを前に、すわ一大事と色めき立つ。今日カシュガルへ到着した支援隊員の南保さん（我々の計画の趣旨に賛同した福井県の高校の先生で BC まで同行）、キルギス人のポーターも交え関係者がはじめて全員顔をあわせた夕食の間も安閑としてはいられない。しかし、ヌルさんは「大丈夫ですよ。」落ち着いたもので、意に介していない。食後、インターネットで情報を収集しようとしたが、おそらく当局の検閲の結果だろう。見出しは見えるものの、内容には入っていけない。さすが中国、報道管制が徹底していると妙なところで感心したりしながら、しかし我々の入っていく地域が未解放、国境未確定地域であるだけに、問題が大きくならないようにと祈るのみ。

翌7月20日、早朝松田さんが、同室の山内君が昨夜は一日不調だった由を伝えがてら、散歩に行かないかとやってきた。これまで三戸呂、山内と初めてウイグルに来た二人がおいしいおいしいとウイグル料理を食べていたが、食べ過ぎ？これもウイグルの洗礼だろうか？入山前に体調管理に気をつけ、慣れない羊料理など自重するようにと、もう少しきつく言っておけばよかったかとも思うが、後の祭りである。

朝食前に松田さんとホテルから南へ 1km ほどのロータリーまで歩いた。途中、かつてのカシュガル古城の城壁があったので、写真を撮っていると、武装警察から咎められた。たまたま、城壁の隣が武装警察だったというのが、この真相だが、こんな風に居丈高に振る舞っているから問題が起こるのだ。権力を傘に着たいやな奴らだ。・・・城壁の脇は深く掘り起こされていたが、何でも地下街の建設中とかで、その入り口には完成予想図が掲げられそこには「加快経済特区建設打造西部明珠城市」と中国語で書かれていた。カシュガルとホータンという南疆の2大都市はいずれも経済特区に指定され、インフラの整備が急ピッチで進んでいる。早朝から重機が動き、街は掘り起こされ、至るところで巨大ビルが建設されている。登山のあとで訪れたホータンも、去年は未開通だった列車の線路が伸び、新たな高速道路がカルギリクとの間に開通していた。「この一年でカシュガルもホータンも大きく変わりましたよ」というヌルさんの言葉を実感したが、そのことばの裏にはウイグル文化が失われていくという一抹の寂しさも込められていた。